

日露戦後文学序説

平岡敏夫

第一節 「国民的精神の一頓挫」

日露戦争は明治三十七年二月八日の旅順港夜襲によって開始され、二月十日宣戦が布告された。「宣戦ノ詔勅」にはまず、「朕茲ニ露国ニ対シテ戦ヲ宣ス朕カ百億有司ハ宜シク各其ノ職ニ率ヒ其権能ニ応シテ国家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ凡ソ国際条規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ尽シ遺算無カラシムコトヲ期セヨ」とあり、「国家ノ目的」ということが明確にうたわれている。ただ、注意すべきことは、「国際条規ノ範圍」をはっきり言明している事実で、このことと「国家ノ目的」とは無関係とは言えないだろう。宣戦布告前の夜襲をやってはいるが、ナシヨナリズムはまだ国際感覚をすべて喪失してしまっていたのではなかったのである。

明治三十七年九月四日、遼陽会戦、あけて明治三十八年一月二日、旅順陥落、三月十日、奉天の会戦を経て、非常な困難のなかで、五月二十七日の日本海海戦の勝利を機に、米大統領ルーズヴェルトの斡旋により、いわゆるポーツマス条約が明治三十八年九月五日に調印された。朝鮮の単独支配権、南樺太の領土、満洲における利権等を日本は獲得したが、これを不満とする一部国民による日比谷焼打事件が九月五日、六日に起こった。日露戦

争勝利へと向けられてきたナシヨナリズムの昂揚がむろんここにある。しかし、戦争終結とともにやがてはそれは鎮静せざるをえない。国木田独歩の短編「号外」(明39・8)はそのころの状況のえがたいスナップである。

銀座は銀座に違ひないが、成程我が「号外」君も無理はない、市街まで落胆して居るやうにも見える。三十七年から八年の中頃までは、通りがりの赤の他人にさへ言葉をかけて見たいやうであつたのが、今では亦以前の赤の他人同志の往來になつて了つた。

其処で自分は戦争でなく、外に何か、戦争の時のやうな心持に万人がなつて暮す方法は無いものか知らんと考へた。考へながら歩るいた。(字研版全集による)

この結びの「自分」の思ひは独歩自身のものと考へてよいが、「号外」君とは、戦争中「国家の大難に当りてこれを拳国一致で喜憂する事に於て其生活の題目を得た。ポーツマス以後、それが無くなつた」ためがっかりして、自分の生命は号外だとして広瀬中佐の号外などをポケットからとりだして朗読したりしている通称「加ト男」(加藤男爵)と呼ばれる男である。戦争がいかに国民の意識を統一させるか、その終結がいかにそれを崩壊させるか、そのことがここに明瞭であり、「戦争でなく、外に何か、戦争の時のやうな心持に万人がなつて暮す方法」への希求は、明治の国民にひそむ根源的な願望にふれてるように思われる。しかし、そのような方法は独歩自身においても、現実には発見さるべくもなかつたのである。「平和克復ノ詔勅」(明38・10・16)にいう。

惟フニ世運ノ進歩ハ頃刻息マス国家内外ノ庶政ハ一日ノ懈ナカラムコトヲ要ス優武ノ下益々兵備ヲ修メ戦勝ノ余愈々治教ヲ張り然シテ後始テ能ク国家ノ光荣ヲ無強ニ保チ国家ノ進運ヲ永遠ニ扶持スヘシ勝ニ狃レテ自ラ裁抑スルヲ知ラス驕怠ノ念從テ生スルカ若キハ深ク之ヲ戒メサルヘカラス汝有衆其レ善ク朕カ意ヲ体シ益々其ノ事ヲ勤メ益々其業ヲ励ミ以テ国家富強ノ基ヲ固クセムコトヲ期セヨ

国家権力側の直感は鋭い。「国家ノ光荣」「国家ノ進運」の保持のためには勝利の後の国民意識が問題である。詔勅は「勝ニ狃レテ自ラ裁抑スルヲ知ラス」「驕怠ノ念從テ生スルカ若キ」ヲ戒めて、日露戦後の思想状況を先

取している。しかし、一片の詔勅ではいかんともしたい趨勢であったことも事実で、三年後には、より強力に、戊申詔書(明41・10・13)を出すことになるが、これもまた大勢をくつがえすには至らなかつたのである。国民意識の再統一は、戦争によらぬかぎり、国家権力をもつてしても至難のことと言わねばならない。

日露戦争に關しての時局講演会が明治三十八年五月から開かれ、その記録が雑誌「太陽」に連載されている。そのうち、法学博士山田三良は「日露戦争と強大国」(明38・8)と題する講演で、「我が日本は従来単に一強国として国際法上に認められて居つたのが、今日は世界の一大強国たることを世界各国から認められんとするに至つた」ことを強調し、「吾々国民は其の身分職業の如何に拘はらず我が国家千載の為に大に熱血を瀉がなくてはならぬ」と結んでゐる。また、普通学務局長(のち文部次官)沢柳政太郎は「戦争と国民の精神」(同)と題し、日露戦後の精神的経営(無形の経営)を重視して、「国民が国民の位置を自覚すること、国民が国民の能力を自覚すると云ふこと」をあげ、「驕慢の心」を戒め、愛国心、利害の關係をはなれた高尚なる精神の維持を訴へている。「国民一般の元気が銷沈して奢侈淫逸の風が起つたならば最も考へなければならぬ、殊に高等の教育を受けた者即ち国民を指導すべき位置に立つべき人の間に元気が銷沈したとあつたならば其關係は極めて大なるものである」と述べていることともあわせて、この発言は当然「平和克復ノ詔勅」を先導するものであり、のちに文芸院設立を企画する官僚にふさわしく、知識人、ひいては文学者にも及ぶものとなつてゐる。しかし、「危機」はポーツマス条約後訪れた。

これら一連の講演を十三回で閉じるにあたり、主催者のひとり大塚保治は、「国民的精神の一頓挫」(明38・12)と題して講演を行なつてゐる。「国民的精神」とは、新聞や雑誌などでは国民の元氣とか精力などの意に用いてゐるけれども、より精密に言えば、として、「第一我々国民が国民として換言すれば利害を共同にして居る一の団体として自分を認めるのです、さう自覚するのであります、さうして其団体の利害休戚を一々身に浸みるやうに感じそれからまた其団体の進歩を計り發達を力めるといふやうな心を指して国民的精神といひます」と規定してゐる。これはそのまま、前掲独歩の思い描いたものにほかならないが、問題はその表現の「方法」なのであ

る。平時でも多少存在しているが、「別して外国との関係が反対も反対、しかも敵対即ち戦争といふやうな関係になつた時分には此国民的精神といふものが最高潮に達するのである、さういふ場合には此精神が殆んど国民全体に行渉つて洋溢してしかも非常に猛烈の程度まで昇つて来るといふのが一般」と大塚保治は述べて、日露戦争におけるその昂揚の経過をたどらうとする。

開戦当初の不安と期待のときは「此時分は号外が一番能く売れた時で一寸した小競合か前哨の衝突位でも二銭も三銭も奮発して号外を買つて見るといふ勢であつた」ともあるが、勝利の確信ができてからは、「まづ国民一般誰も非常に立派な壮大な日本国民の将来といふ Vision を描き出した」として、政治上、經濟上、東洋において欧米を圧倒し、東洋の文明と西洋の文明とを融合調和して一層偉大な新文明を建設するとか、日本の文明の発達はこれで完全であるから西洋文明をとりいれるよりも逆に日本の文明を西洋に伝播すべきだ等の議論が生まれ、自分らもそういう始末であつたと述べる。ところが、それが「今は遺憾ながら正眞の夢、空想になつて了つた」「突然ポーツマス条約といふ声で打壊されて了つた」のであり、この不完全な条約調印によつて「是迄はズツト挙国一致といふ態度で以て進んで来たのが初めて官民不調和といふ有様になつて来た」現在、「国民の不平といふものが此儘に進んだならば、或は元氣が沮喪していぢけて了ふか、さもなければ自暴を起して奉公心がなくなるか二ツに一ツどちらかに行着くのです、それより外に国民の不平のはけ口はない、国民の心は此二ツの dilemma の角に掛つて居る」と大塚保治は状況を把握し、政府が適当な疏通の道を計らないで一時しのぎの姑息手段でおさえて行こうとするなら、国民的精神の前途は危く、解体してしまうかも知れないと警告して、次のように言う。

……殊に私の考では今後の日本の社会では縦令今回の官民衝突といふことが極円満に解決されたとした所で、是から必らず盛に起つて来る二大思潮の爲に国民的精神といふものは余程圧迫を受けるだらうと思ふのであります、二大思潮と申しますのは一ツは個人主義といふ潮流また一ツは世界主義或は人道平和主義といふ潮流で此二ツの潮流は今でも既に相応の勢力を持て居ますが今後は益々強盛になるのが自然の勢であると思ふ、で若し今日政府の方で国民の不幸を此儘に放つ

て置いたならば前に話したその国民の一部即ち硬派の自暴党の方は先を争つて皆個人主義の潮流に投して了ふし、また軟派の沮喪党の方は悉く揃つて世界主義或は人道平和主義の潮流に流れ込で了う、さアさうなれば日本の社会は全く個人主義と世界主義の二潮流で横領されて了つて国民的精神といふやうなものは其間に挟まれて余程苦しい位置に陥りはしないかといふことを私は憂ふるのであります、

大塚保治の分析・状況把握はかなり正しいように思われる。日露戦後、「国民的精神」、すなわち統一的な国民意識は崩壊して、個人主義、あるいは世界主義・人道主義といった方向に分裂するとみているが、むしろ個人主義、あるいは世界主義・人道主義といったものに対する評価は、彼の場合マイナスのイメージが強い。自暴的方向が個人主義、沮喪的方向が世界主義・人道主義であつて、「国民的精神」を価値基準とするかぎり、いずれも彼にとっては容認できない危険なものと映つていた。政府が言論統制や戒厳令、あるいは金力等の威圧で抑えるのは容易だろうが、平時はともかく、一旦事が起こつたときは「国民の好意で国民の徳義心から献身的に国家の為に尽力して貰ひたいと政府が頼まなければならぬ」、万一そういう場合になつたときに民心離反ということのおそろしい結果に思い当り、後悔してもすでにおそいのだと大塚保治は言う。さらに、現政府中心に考えることに警告して、国家のため国民のためということを第一に考えるようにすべきであるとし、それには政府が「早晩必らず国民一般の不満足といふものを慰撫するに就て断乎たる処置に出づること」を期待している。この期待が何であるかは明瞭ではないが、大塚保治がアジア大陸に対する「発展」的政策を望んでいることは推察できる。こうした期待に直接こたえるかどうかは別として、たとえば、この講演の翌月の日韓保護条約(明38・11・17)を経て、明治四十三年八月、日韓併合を強行する政策にもそれは明らかであり、ひいては、太平洋戦争時の大東亜共栄圏政策(昭15・20)にまで及ぶのである。

また、「威圧」的政策を政府がとらなかつたわけではまったくなく、明治四十年四月には改正刑法の公布(翌年十月実施)、同年九月には、陸軍管轄区域を改正して六箇師団を増設、計十九箇師団とし、翌四十一年三月には、監獄法公布、四月には陸海軍刑法公布、さらには、国民全体を直接対象として戊申申請書がこの年十月十三日に発

せられるのである。その二年後にひきおこされる大逆事件という大弾圧についてはここでことさら言うまでもない。これらは大塚保治のいわゆる「国民的精神」を国家権力側から強制せんとしたものと見えようが、逆にみれば、一方で「発展」的政策にもかかわらず、こういう一連の「威圧」的政策をとらざるをえないほど「国民的精神」の分裂・崩壊がはじまっていたということになる。『発展』的政策と「威圧」的政策は内外呼応するものだったと言ってもよい。

「国民的精神の一頓挫」という事実から、日露戦後ははじまったものと見られるが、それは大塚保治の講演でも明らかのように、「国民的精神」への願望が消滅したということを意味しはしない。独歩のみならず、日露戦後を生きた文学者たちの胸奥にも、さまざまなたちをとりながら、それはひそんでいたと言えるだろう。まず、ポーツマス条約締結以前からの文壇・文学者の戦後文学への展望を見ておかなければならない。

第二節 「戦後文界の趨勢」

夏目漱石はポーツマス条約調印以前の明治三十八年夏に「戦後文界の趨勢」(明38・8「新小説」と題する談話を発表している。これは「新小説」が企画した「戦後の文壇」特集の第一声とも言うべきもので、以下何人かの発言がつづく。あらかじめ列挙しておけば次のごとくである。

戦後文界の趨勢

夏目漱石(明38・8・1)

三策

群柳芥舟

戦後の文壇

角田浩々歌客

戦後の文壇に就て

上田万年(明38・9・1)

戦捷後の文壇に対する希望

山路愛山

戦後の文壇

上田 敏

非常な人

三宅雪嶺

極端から極端

島田三郎(明38・10・1)

戦後の文壇に就て

幸田露伴

戦後文壇に対する予の希望

海老名弾正

戦後の社会状態と文壇の趨勢

樋口龍峽(明38・11・1)

右の十一名の発言によつても、当時の文学者・思想家たちがこれからの日露戦後文学に対してどのような展望を抱いていたかがうかがわれる。漱石を除いてこれまで紹介された例を知らないもので、ここでは、できるだけわしく記述することにしたが、まず、漱石の例で言えば、彼は「兎に角日本は今日に於ては連戦連捷——平和克復後に於ても千古空前の大戦勝国の名譽を荷ひ得る事は争ふべからずだ。こゝに於てか唇に力の戦争に勝つたといふばかりでなく、日本国民の精神上にも大なる影響が生じ得るであらう。」と語り出している。維新以後、西洋文化への追隨が支配的な現象となり、それへの反抗として国粹保存主義が一時勃興したにしても全体の趨勢にはとうてい及ばなかつた。「凡ての発達は如何しても人間に氣力——精神がなければ出来ぬ。精神といふのは自分はこれだけの事が出来るといふ自覚自信の力である。この自覚自信の無い國民は、國民として起つことは出来ぬ。」——漱石はこう述べて、自己を基礎とせず西洋を標準としたこれまでの弊をつき、歐洲第一流の頑固で強いつつといふロシアに連戦連勝したという物質上のことは精神界へも非常な元氣を与えたとして、戦後は日本自身を標準とするので人間が窮屈でなくなり、「文学界の製作としても非常に濶達にのびくした感じを以て対するところになる。」と言う。また、戦後における經濟的變化で日本の富が膨脹してくれば、すべての贅沢な職業・事業が発達し、「文学の如きも無論この部分に属して発達して来る」と述べている。

「英國のエリザベス時代の文学が興つたのは、一つはスパニッシュ・アーメーダの艦隊を破つたので、天地が広くなつて歡樂を尽す方面に一般の氣風が向き、世の中が自由であるといふ氣で作をするから、勃々たる生氣が湧いて来て、決して窮屈の態が無い。夫で人を愕すやうにばつと文学が盛んになつた例証を見ても解ることであ

る。」という結びを見て、かなり楽天的な展望というよりほかはないが、漱石のいう自己を基礎とする自覚自信の力——精神ある国民は、はたして日露戦後成立しえただろうか。何をもちて文学の発達・隆盛とみるかは問題であるが、日露戦後の文学が戦前より盛んになり、発達したとしても、戦勝という物質上のことがそのまま精神界に元氣を与えた、というような事実にもとづくものなのかどうか。問題の検討は今後に残されている。こうした発言にもかかわらず、以後の漱石は「千古空前の大戦勝国の名譽」と文学の隆盛とを直結するどころか、それとは逆に、いわば物質と精神のその矛盾を、文学への深いモチーフとすることになると考えられる。⁽¹⁾

畔柳芥舟の「三策」は、戦勝による楽天的な期待を、文壇への償金の分配という他愛ない話として語ったもので、まったく戦勝に手放しであるが、角田浩々歌客の意見は見のがせない。浩々歌客は文壇・文学者の視野が大きくなるとして、かつて日本国民文学成立の曙光がこの戦争中にほのみえると言ったのは、わが文学が自己独立の思想から生まれるの意であった、従来これを意識せず、世界思想といった人間共通の思想のみ唱え、それを模倣していたとし、「戦後の文学には、少くともこの日本独自一己の思想があるといふことを意識し、自覚し、若しくはその思想でこの世界人生を解説し批評しやうといふやうな心の見ゆる作品が見えるであらう、また見えて来なければならぬ」と述べている。漱石の発言と共通するところがあるが、具体的な予測としては、諷刺的な小説、滑稽的な脚本、国民の史蹟を題材としたもの、科学的な批評観察、大規模な紀行、精細な社会描写などのほか、国命を賭した戦争として「人生悲哀と歎楽との両面鏡、運命といふやうなものが不可抗の力を以て居ることや世界といふものは不思議な組織なものだと観ずること」などに言及しているのが注目される。この見解についてはまた後にふれたい。

上田万年は、「当分新面目を呈することは無いと思ふ。或は真面目を呈するのは、戦前よりも悪くなることか却て国の為めではないかといふ奇矯なる判断を敢てしたいと思ふ。」と述べるが、これは実は奇矯でも何でもなく、戦後、東洋支配、世界支配の日本となった暁には、有為の青年および大人物は大なる日本のために大経営をなさねばならず、陸海軍や農工商の実業方面に吸収されるべきであり、「文学の如き不生産的な、亦一種美術的

の側に多くの人材は寧ろ向かなくなるのではないか」という理由によるものである。しかし、社会の発展により新聞雑誌その他の事業もともに進むから文壇の発展の望みがないとは言わぬと述べ、「私は個人として希望する。戦争後の日本の世界に於る地位から考へて、文学の上にもかういふことがありたいと思ふ。日本の文学は今日まで余りにも島国的で世界的でない。これを一番世界的にするやうに考へて貰ひたい、言を換へていへば、日本人の固有の精神感情を發揮して居る国民的文学を世界の人に紹介するといふ考を有つて貰ひたい」とも言っている。浩々歌客と同じく上田万年にも国民的文学の夢とその世界的発展の幻想があつたのだ。しかし、彼はその逆をも仮想できた。「即ち日本人が戦捷の結果を有つて非常に満足し得意になつて所謂徳川の元禄時代のやうな時勢を作り出すか、或は絶對的に鎖国主義を執つて外来思想の排斥をすること」であるが、おそらく実際にはそれほど危惧してはいなかつたとしても、前者のような仮想はその後現実のものとなつたふしがある。

山路愛山はどうか。愛山は今日の小説はその規模が小さいとして、『水滸伝』『八犬伝』などを引きつつ、大なる作物を求め、歴史小説、地理小説、科学的なものを書いてほしいと述べる。恋愛小説を排斥するのではないが、これをもつと意味あるものとして大きなものとしてほしい、紅葉全集、露伴全集の個々を通してあれだけのものをひとつの作物としたものを作りたいとする希望のほか、女子教育の向上に関連して家庭にすぐれた小説が入ることで新日本の家庭の建設に献することを文壇に要請したりしているが、かつて明治二十年代に人生相渉論争などを通してみられた愛山の文壇批判はここでも變つていないと言えよう。

上田敏は次のように言う。戦後の大発展の影響で文学も著しい変化を見るだろうが、戦勝が大文学の勃興をきたすといった発言は、古来の文芸史を通覧してもそうとはきまっていけないという。敏が指摘するこの類の発言は、漱石をはじめ多くみられたところだが、上田敏はこれまでの戦後文学への発言を批判的に見ようとしているのである。彼は某大尉の戦中日記を引き、「世界の文明思想が如何に純日本思想と融化して居るかを示す貴重な『ヒウマン、ドキュメント』』と言ひ、銃火の洗礼が「日本国民に如何なる感動を与へて居るか」を理解しえたと述べて「戦後の文壇は斯る真面目の生活を閱歴した人を、少くとも聴衆の一部に持つのである」と言つてい

るが、これは国民意識ともかかわる重要な指摘と思われる。さらに次の発言は記録にあたいしよう。

今後文壇の中堅なる可き文学の特色は、真面目といふ事が、第一条件であらう。一昧、此日露戦争は、大日本勃興の序幕であつて、平和克復の後、吾国民の責任は益々加はり、努力は愈々必要になつて来て、決して悠長な所謂天下泰平の時世とはならぬ。凱旋式が済むと、吾等は遊で居て金が儲かり、無為にして、国家が隆盛になると思へば、大変な心得違だ。これからは、愈々世界文明の中流に棹して、平和の競争を試み国民の特色を発揮して、全人類の進化に貢献するのである。それ故、識見ある人は、是迄弥縫塗抹してあつた種々の胡魔化を信じて安心する事が出来なくなつて、真面目の解を人生に就て試みるやうにならうし、又一方には、此思想界の変動と共に、現今の社会組織より起る實際の考究問題も生ずるし、それやこれや真面目の心々に写れば、茲に始めて生氣ある文芸が成立しやうと思ふ。戦後の文壇の贏ち得べき利は、人生に対する深刻なる考究、真摯なる態度である。

上田敏のこの発言自体真摯なものであるが、戦後は空虚な大風呂敷をひろげたり、公衆を撻るような平俗な文章が流行し、出版業者、購読者、新文豪が輩出して暫時隆盛となるうが、真に文芸の美を楽しもうとする者にはいく分迷惑かも知れぬ、とハイブラウぶりを示す。「戦後は国民の自覚心の発生と共に、国民文学が成立する、外国文学模倣の弊が一掃されやうといふ論は、至極尤な意見である」が、それが新思想をまじえない武士道一点張りや形式まで従来の通りというふうにはけつして行くまい、とも述べているが、「所謂武士道にのみ氣を取られて眼前新時代の民心に横溢する煩悶、即ち生存競争、社会对个人の問題を閑却する如きも短見と言はざるを得ぬ」とする敏の発言は、新時代をかなりに先取するものと言える。だが、日露戦後間もなく『海潮音』(明38・10)を刊行し、のちに唯一の小説『うづまき』(明43・6)を書くに至る彼自身の方向を考へるとき、日露戦後文学の道すじもまた複雑なものと想像される。すなわち、「真面目」という問題——「人生に対する深刻なる考究、真摯なる態度」と、耽美的とされる小説『うづまき』の評価の問題である。

上田敏も否定していたが、三宅雪嶺(非常な人)もまた、漱石をはじめとする、スペイン艦隊を破つたエリザベス朝時代の文学云々の比喻を大なる思いちがいであるとし、敗北したスペインも文学は衰えなかつたのであ

り、非常な人によってではなく、「普通な人物が多く集つて、非常な事業の成立つ時代になつて来た」と述べている。また、かつて明治二十年代初頭の文学を、「文学極楽」として批判した島田三郎は、まず、戦後極端な軟文学が起こるであろうと言ひ、さらにこれを矯めんとして極端な硬文学が起こるだろうと述べているが、これも明治二十年代における自身の発言のくり返しと見られる。しかし、日露戦後文学において硬軟文学とは何かと意識しておくのもあながち無意味とは思われない。

幸田露伴は、それほど大なる変化はあるまいとしつつ、国民の自覚が増進されるであろうが、「国民が自己の位置を自覚すれば文学にしても、従来のクダライ内輪騒ぎや、馬鹿々々しい楽屋落ちの文学は排斥するといふ方面に向つて来る、即ち一般が漸次に真面目な世の中になつて来る。で文学もこれに伴つて真面目なものが現はれて来やう。」という。国民の自覚とそれにとまらぬ真面目な文学というのは、上田敏の発言とも重なるが、露伴のはもっと單純明確である。それにしても、真面目とは何かがやがて問われねばならないだろう。

海老名弾正は、「文学は時代の声であるから此の千古未曾有の大戦後に一大發展をなすことは自然の勢ひ」と言ひ、要はただ国民の元氣如何にあるとして、大勝利という確信と、その結果は民族が予期したものでなかつたという苦痛、大国民という自覚と、その期する所は前途遠く、あるいは臥薪嘗胆の苦の惨なるを覚悟しなければならぬ、とする二つの精神ということにふれている。ここには明らかに九月五日調印のポーツマス条約が反映しており、「戦後の文壇」第一声の漱石以下のごとき、大勝利の充実感とははや表現しえなくなつてみるとみられる。海老名弾正は当今の小説にも言及し、作中人物が偉大でないとして、「金色夜叉」にしても「お宮の如き、あの人格を以てしては、あれを女学生に示すことは私は出来ぬと思ふ、貫一の如きも意志の薄弱な男で渠の為に同情の涙に咽ぶといふ訳にはいかぬ」云々と述べ、戦後の困難な課題の中から「小説の材となるべき人物にも非常の危険と難問を被つて奮闘する雄大な人格を攫むことが出来る」という。

「これを恋愛の上から言つても非常な苦悶と奮闘して満洲の野、朝鮮の山に於て大事業をなすこと十年——十五年の年月を以てして壮心烈々漸くにして恋愛の玉を握り得るといつたやうなものを書いて欲しい」とあるのは

正直な明治キリスト者の面目を示すものであるが、結びの「人格の文学」の要請もふくめて、彼の希求する方向に日露戦後文学は進んだかどうか。答はおそらく否であり、こうした予測はむろん海老名正の戦後認識と文学観によるものである。

最後の樋口龍峽は、これまでの多くの発言をとりこんでまとめた感があり、独自なものはいくつか、浩々歌客が人生の悲哀にふれ、上田敏が某大尉の戦中日記を引きつつ、真面目ということ述べた部分などを、より明瞭に大きく増幅したものとして次のように言っているのは、戦争の悲惨に言及した数少ない例として記憶されなければならぬだろう。

近世の武器の猛烈な破壊力は、一弾の下に貴重なる幾百の人名を奪つて、忽ち屍山血河の惨を演出する。たとひ君国の為めとは云へ、多数戦死者の遺族中には目もあてられぬ悲惨に陥るもある。うら若い寡婦が夫の位牌を抱いて銷魂するもあらう。白髪の老夫、愛児の墓畔に血涙を絞るも幾ばくだらう。此の如き事実を見聞するものは誰か人世に対する真面目の観念を抱かぬであらうか。此人世に対する深刻な感想、真面目の観念は、文学隆盛の為には極めて必要な要素である。

大勝利に酔っていたポーツマス条約以前には聞かれることのなかった沈痛な発言である。龍峽は戦争中の出来事の凄絶、崇高、悲哀等が文学上の好資料を供することにもふれているが、「近世武器の猛烈な破壊力」の指摘をふくめて、『肉弾』(明39・4)『此一戦』(明44・3)の出現はそのことをあかすものと言えよう。⁽³⁾

以上、「新小説」の連載特集「戦後の文壇」における諸家の発言をあげてきたが、明治三十八年時においてはまだ混沌たるものがあるとしても、九月のポーツマス条約調印を期としてひとつの変貌がうかがわれるはずである。楽天的展望にもかかわらず、漱石の「自覚自信の無い国民は、国民として起つことは出来ぬ」という発言は、漱石自身においても消滅したなどと考えることはむろんでできないが、エリザベス朝でなく日露戦後に、「人を憐れずやうにばつと文学が盛んになった例証」を漱石ははたして見てとったかどうか。この設問自体が「国民的精神の一頓挫」と深いかわりがある。

世界思想といった人間共通の思想のみを唱えるのではなく、「日本独自一己の思想がある」戦後文学を求めようとした浩々歌客と同じく、上田万年にも国民的文学の世界的発展の夢があり、上田敏は戦後文学の第一条件として真面目をあげていた。露伴・龍峽も同様である。武士道や旧来の形式をしりぞけ、民心に横溢する煩悶——社会対個人の問題を閑却するなどと警告した上田敏は、大塚保治の指摘した個人主義的方向の必然性をも理解していたと言えよう。「千古未曾有の大戦後」を反映した規模壮大な文学は海老名弾正や山路愛山が期待するように生まれたかどうか。海老名の場合はずでにポーツマスを経っていたのだが、要はただ国民の元氣如何であり、大勝利の歓喜とその裏腹の、報われざる今後の苦痛のなから文学が生まれるという場合、依然として統一的な「国民的精神」がそこに想定されていたことは明らかである。それはやはり幻想にすぎなかったのだろうか。それとも日露戦後文学の根底にひそんでいるものだったのだろうか。龍峽のごとく、夫の位牌を抱くうら若い寡婦、愛児の墓畔に泣く白髪の人々に視線の及ぶとき、「国民的精神」への願望は戦後文界の趨勢のなかにどのようにとけこんで行ったと言えるのだろうか。

(1) 拙稿「日露戦争と漱石」、『明治文学史の周辺』所収、昭51、有精堂参照。

(2) 「うづまき」については、本論で作品論を用意する予定である。

(3) 拙稿「明治の戦記文学——『肉弾』『此一戦』をめぐる——」(昭48・8「解釈と鑑賞」)参照。本論の基礎稿の一をなすもの。

第三節 「小説壇の新氣運」

ポーツマス条約以後出現した小説で、まずもつとも注目されるのは藤村の『破戒』(明39・3)である。明治三十八年十月以降、『破戒』出現までは、漱石の『蕪露行』(明38・11)「趣味の遺伝」(明39・1)や伊藤左千夫「野菊の墓」(同)が目につく程度であり、『破戒』の刊行に至って空前の反響を呼び、三十余に及ぶおびただしい『破

戒』評が書かれた。執筆開始は明治三十七年春、日露戦争勃発時であつたとは言え、『破戒』こそ日露戦後文学の先駆と呼ばれるべき作品である。これと同じ月に、九つの短篇からなる独歩の『運命』が刊行されており、翌四月、「坊つちやん」を発表した漱石は、これをふくめずに、明治三十八年一月、「吾輩は猫である」と同時発表の「倫敦塔」以下の短篇、すなわち、「カーライル博物館」(明38・1)「幻影の盾」(同・4)「琴のそら音」(同・5)「一夜」(同・9)に、前掲「薙露行」「趣味の遺伝」の七篇をまとめ、五月『濛虚集』として刊行した。「早稲田文学」(明39・10)はその「彙報」欄において次のように述べている。

◎小説壇の新気運 は本年の春に入つて、稍発動し初めた観がある。其の以前しばらくの小説壇には、さして著しい現象も見えず、大体に於いて、在来既に名を成せる人々の馳駢に任せてゐるの観あり、夫等の人々に在つても、未だ斯壇に生面を開展し来るといふが如き態度をば取らず、所謂写真派小説といひ、家庭小説といふ在来の風潮を追ふに止まつてゐた。たゞ近年來漸次其勢力を扶植し來たつた最近歐洲文学の翻訳若くは翻案の影響もあつて、旧來の作家も、其著想若くは描写の形式文体の上に、多少の新工夫を試みんとする傾向は見えてゐた。然れども其等多少の新趣向も未だ特殊の発現を見ざる間に、斯壇の比較的新しく且つ進んだ風潮を代表せりとも見るべき作物は、在來の作家の手によつて与へられずして、却つて在來文壇の別方面に於いて名を有し、若しくは未だ小説壇に著しく名を現はさなかつた人々によつて示され、今年に入つて以來、頗る注目すべき新現象を呈して、春の若葉の充ち薫る如くに、斯壇は一味の清新の氣を着けたる感があつた。即ち、三月の下旬には、島崎藤村氏の『破戒』、国木田独歩氏の『運命』、五月の中旬には夏目漱石氏の『濛虚集』が世に現はれた。

「早稲田文学」記者は、明治三十九年に入つて小説壇の新しい気運が発動しはじめた観があるとし、これまで小説壇ではさほどに名をあらわしていなかつた人々、すなわち、藤村・独歩・漱石をあげて、その清新な作品『破戒』『運命』『濛虚集』に言及しようとしたのである。これら戦後の新文学の意義に関して以下詳述されているのだが、周知のごとく、この号の「早稲田文学」彙報欄は『破戒』研究史、漱石研究史、また独歩研究史の上からもそれぞれ注目されている文献であつて、個々の復刻もすでに行われている。

つまり、その彙報欄は作家にしたがって三つに分割されて復刻されているわけで、まさしく今日の作家単位・個別研究という研究状況をよく示している。したがって、前掲の三作家共通にかかわる部分はそのままうち捨てられることになっているが、こうした研究傾向に対するひとつの反省の上に「日露戦後文学の研究」という本稿の主題もまた成立しているわけである。切りはなして個別に見るだけではなく、「早稲田文学」記者が今年に入ってから「頗る注目すべき新現象」とした、この三作品出現の統一的な意味を見出すことが必要であろう。従来の文学史研究では、藤村と独歩は自然主義という共通項を設定することによつても、じゅうぶんな関連づけを与えられていたとは言いがたいし、日露戦後の新文学として漱石と藤村、あるいは独歩と漱石とを結びつけた文学史の見取図に接したこともないと言つてよい。

さて、「早稲田文学」彙報欄は『破戒』（二頁—五頁）、漱石（五頁—三二頁）、独歩（三二頁—三六頁）といったスペースで、これまでこれらの作家・作品に与えられた批評をていねいに紹介・引用しつつ、詳論している。これら、おびただしい批評及びそれを詳論するこの記事自体に、日露戦後における文学意識を読みとることは可能であろう。戦後文学としての作品の意味とそれを受けとめる批評の意味とが同時に問われなければならないのである。まず『破戒』の場合を考えてみたいが、のちに『破戒』論のなかであらためてとりあげる予定なので、ここでは要約的にとりあげておくことにする。

記者は『破戒』が非常な期待をもつて迎えられたことをあげ、それだけに不満の点も数えられたとし、「尤も此の作が一種の清新なる文体並びに思想感情を有してあるといふ点に於いては、諸家の説殆んど一致してゐたやうである。」とまず、その新しさについて述べる。つづけて「この作に於いて、作者の描き出さんとした点は、社会の別階級として卑しめられる、穢多擯斥の旧思想を骨子として、穢多種類の個人と、同族以外の社会全般との杆格に材を採り、一種の新らしき個人の苦痛を描かうとしたものであるらしい。この意味に於いて、或ひは個人対社会の衝突、若しくは痛切なる生活問題に触れたものであるとの評があつた。」という。『破戒』は信濃という遠い山国まで浸蝕した、今世紀の緊張した生活状態の縮図であり、老朽教員敬之進を除いては、作中人物がこ

とごく社会に対して積極的態度をとっているとす。『行け、戦へ、身を立てよ』と教えた丑松の父の精神は、やがてこの篇を貫く精神であつて、丑松も同様であり、「丑松の意志に反して、社会がその生活の享楽を奪はうとするとき、悲壮な葛藤は生ずるのだ。」と述べた「芸苑」の羚羊子の評を引き、さらには「早稲田文学」の島村抱月の評を引用して「即ち社会对个人の苦痛と、それより生ずる個人内面の苦痛とを描かんとした点に、この作の生命がある」というところに記者はまず焦点をあてている。

『破戒』に対するこうした受けとめ方は、『破戒』が上田敏のいう「新時代の民心に横溢する煩悶、即ち生存競争、社会对个人の問題」をまさに描き出したということを意味しているはずである。作者藤村にこの自覚があつたとすれば、そこには藤村なりの日露戦争体験・戦後体験があつたと言えようか。むしろこれについてはのちに考えなければならぬ。すなわち、「種々の胡魔化を信じて安心する事が出来なくなつて、真面目の解釈を人生に就て試みるやうにならうし、又一方には、此思想界の変動と共に、現今の社会組織より起る實際の考究問題も生ずる」（上田敏）云々に関連してくる問題なのである。

主人公丑松の性格に対しては、告白の場面を中心として「あまりに弾力若しくは興奮性に乏しい弱々しい意気地のないものになり過ぎてゐて、同感を滅殺する」という非難が著しかつたと述べているが、丑松の告白が弱々しいかどうかは、作者および読者をふくめ、あらためて検討される必要があるだろう。そこからさらに進んで『太陽』の長谷川天溪が平凡なる性格の主人公を描くよりも非凡なる性格の人を主人公として描けと述べているとし、また逆に、「中央公論」の烟霞生が著者の描かんとしたところは「碌々たる者の酸苦」であり、『破戒』一篇は人生の凡生涯の縮図といつてよいとする、まったく反対の意見を述べていると指摘する。

記者は、桑木巖翼が「新声」で小説の主人公や事件が平凡であるかどうか必ずしも問題なのではなく、「只人物に対する小説家の解釈描写の方法の巧拙によつて、小説に差別を生ずる」と言っているのを穩当な解釈であるとし、『破戒』が凡人を描いたとする非難を打ち消しているが、三宅雪嶺が、戦後において「非常な人」ではなく「普通な人物」による「非常な事業」を期待したことも想起される。また、平凡な主人公丑松という批評に

関し、「読売」の正宗白鳥の「少年時代は意に介せざりし者が、先輩の言行により又他の穢多の侮辱さるゝを目撃せし爲めに、自己の現状を意識して苦しむ。自覚心の煩悶なり。」を記者はあげているが、この「自覚心」は、これまで「戦後文界の趨勢」でくり返し説かれた国民的自覚とは必ずしも重ならない。逆に部落民ということにより、国民的なるものから疎外された者の自覚であつて「社会対個人」における後者の自覚にほかならない。記者自身、「破戒」における丑松個人の内面の葛藤を、上田敏などのいう「社会対個人」の問題の根底においてとらえていると言えるのだが、ここに明瞭に見てとれるのは、日露戦後における「赤の他人同志」(独歩)の現実である。むろん、同僚銀之助やお志保、あるいは生徒などの丑松側に立つ人間もないではないが、統一的な国民意識などここには見るべくもない。部落問題を持ち出すとき、国民的一体感などふつとんでしまふような現実があらわに見えてくる、それがまさしく日露戦後にほかならない。

無恋愛小説という呼称が『破戒』のみならず漱石・独歩にまで与えられているが、恋愛が人生に重大な意味ある事実であるとしても、「それよりも更に深痛且つ切実なる人生根底の問題、即ち厳肅なる生活の問題」が最近時の人々の胸に迫り、恋愛を説く以前にこの焦眉の問題に真面目なる考察を費すべき時となつたのではないかと記者は言う。山路愛山や海老名弾正が戦後文学の問題として旧来の恋愛小説からの脱却をとりあげたのもこの点にかかわっているはずである。「恋愛以外人生の一大事あることを示して、こゝに厳肅且つ真面目なる意識を喚起する点に着眼したること、作者が真面目なる態度を持して芸術の製作に従事したといふ事實は、従来寧ろ小説壇の人を以て目せられてゐなかつた作者が一躍して新氣運の一先駆者となつたといふ事實と相俟つて、在来の作家並びに後進の人々に、多少の有益なる刺激を与へたことと察せられる。」と記者は述べるが、『破戒』ならびに作者を記者がこのように受けとめること自体が、まさしく、上田敏の予告した「真面目」——「人生に対する深刻なる考究、真摯なる態度」という戦後文学の状況を明確に示すものと言わねばならない。だが、日露戦争とともに書きはじめられた『破戒』のすべてを、日露戦後の状況にのみそのまま重ねてとらえることの疑問をまた打ち消すことはできないだろう。

『破戒』以前の短篇をあつめた『緑葉集』（明40・1）の序には次のような周知の一節がふくまれている。その評価が問題である。

……日露戦争が始まつてから、予の知人も多く召集された。同僚の教師も兵役に就いた。予が教へた二三の青年も出征した。田舎教師としての予は屢々小諸の停車場に出征の人々を見送つて、多くの戦士と家族との悲壮な別離を目撃した。予は遠く山家にあつて都の友人等が觀戰の企てを聞き、自分も亦筆を携へて従軍したいと考へたが、遂にその志は果されなかつた。そこで予は『破戒』の稿を起した。人生は大なる戦場である、作者は則ちその従軍記者である——斯う考へて、遠く満洲の野にある友人等も、小説に筆を執りつゝある予も、同じ勤めに服して居ると思ひ慰めた。三十七年の夏、函館にある秦慶治氏、同貞三郎氏、其他二三の家族を訪問する為に、津軽海峡を渡つて始めて北海道の土を踏んだ。丁度露艦襲撃の噂のある頃で、殺氣は北海の空を掩ふて居た。小諸へ引返して直に書いたのが『津軽海峡』である。

藤村は短篇「津軽海峡」には日露戦争を直ちに反映させながら、『破戒』の作品世界には日露戦争を（また特定の時代すらも）しりぞけているのだが、右の部分は『破戒』と日露戦争との關係を示す重要な資料なのである。

日露開戦時の国民意識について、前掲大塚保治は「申すまでもなく昨年二月開戦の当時といふものは此戦争は始めから国民全体が希望して待ちに待つた戦争でありますから無論勝つには違ひない（い）や必らず勝つといふ確信が慥かに一方にあつた、けれどもまだ戦争をして見ないといふと分らない方に一つ負けないとも限らない、といふ訳で一方にはまた非常に不安心な所がある心配があつたのです、最初の間は此確信と不安の心持と双方が入り混つて国民全体の心は非常に張り詰めて期待の状態とでもいふべきか強烈なる expectation の有様になつてゐた」と述べている。藤村もまたこの「強烈なる expectation」に動かされて、同僚の教師、教え子、都の友人などと同じく従軍の志を抱いたが、果たされなかつたのである。『破戒』の起稿、執筆過程は満洲の野にたたかうこととまさしく等価であつた。『破戒』と「国民的精神」が密接な關係にあることはむろん否定できない。

迫害される部落出身の一教師の物語は、そのような事実を看過しえない藤村自身の自覚と、「国民的精神」、すなわち「我々国民が国民として換言すれば利害を共同にして居る一の団体として自分を認める」という自覚とは

当然重なりあうはずのものだったと考えられる。にもかかわらず、主人公丑松は飯山から放逐され、テキサスへと旅立つ。国民としての一体感どころか、社会対個人の対立というところに至ったのは、起稿時にすでに抱いていた原構想であつたのかどうか。そのことは確定できぬとしても、藤村における「国民的精神」の自覚があつたればこそ迫害される部落民を主人公としたこのような『破戒』を書ききることもできたのであるとする見方は可能である。あらためて作品論を用意したいのだが、後年藤村は次のようにも述べている。「この作は私が長篇小説の最初の試みであつた。私は自分の内にも外にも新しく頭を持ち上げて来た鬱勃とした精神でこの作を貫くべく決心した。」(『現代長篇小説全集』第六卷、昭4、新潮社。この「内にも外にも新しく頭を持ち上げて来た鬱勃とした精神」こそ藤村自身をふくめての「国民的精神」にはかならない。「鬱勃とした精神でこの作を貫くべく決心した」その決心は、「国民的精神の一頓挫に」至る戦後、すなわち明治三十八年十一月二十七日の脱稿の日までそのまま貫かれたかどうか。『破戒』という長篇の全体像にかかわってくるが、これは『破戒』論における重要な視角であり、課題であると言わなければならない。

「早稲田文学」彙報欄記者はつづいて「この作者(注「藤村」と相前後して新たに小説壇に現はれ、一種類例なき特色を以て忽ち文壇の流行児と称せらるゝに至つたのは夏目漱石氏である。」とし、『吾輩は猫である』の既出分(明38・10刊)とその続稿にふれつつ、『濛濛集』に及ぶ。『濛濛集』以前でも世評は全然現われなかつたわけではないが、多く批評の対象となり、全体の上から評価を受けるようになったのは『濛濛集』刊行以後のことであり、『吾輩は猫である』とあわせて、この作者の面目全体を理解し評価するようになったと述べている。

まず、『猫』については、その「特殊なる叙述の様式」にふれつつ、「この作に於いて最も著しき特質は、清新奇警にして鋭利なる観察に富み、上品なる諷刺滑稽の趣味に充ちてゐること」をあげて、「在来多く閑却せられてゐた此方面の新境地を開拓したものだといはねばならぬ。」としている。また、「新小説」の後藤宙外などを引きつつ、「幽鬱なペーソスの趣きある一面に、一種シニシズムの趣きが現はれてゐる。」とも指摘し、さらに「自由な叙述のために自づから冗漫に墮する傾きもあるが、又処処清新にして奇抜なる譬喩警句に富んで、人をして飽か

しめぬといふが諸評の帰するところであらう。」と述べている。『猫』は明治三十八年一月から発表されており、『破戒』と同じく戦中からの創作であるが、『猫』上巻に関しては戦後文界からおおむね右のように受けとめられたことになる。『破戒』と同じく、受けとる側の戦後文学意識の問題でもあるが、さきに角田浩々歌客が予測した「諷刺的な小説、滑稽的な脚本……」といったことも想起されてよい。つづいてとりあげられる『濛虚集』も『猫』と同様、戦中執筆のものをふくんでいるが、記者は『猫』と比べつつ、次のように言う。

……清新奇警な諷刺滑稽譬喩警句などに富んである点に相異はないが、唯、『我が輩は猫である』に見ることを得なかつた沈痛幽玄の趣があつて、一種の神秘的傾向がほのめゆるところ、並びに其の文章に於いても、概して前作に比して緊張した趣きがあり、従つて力もあり重みもあるといふ所に、前作に見えざりし別個の特色を發揮し來つた観がある。

今日、『猫』と『濛虚集』との関連についてはさまざまな見解があるのだが、右の同時代評は『猫』に見られぬものとして、『沈痛幽玄の趣』『一種の神秘的傾向』を指摘している点において今日の評価の先蹤をなすものと言えよう。ポーツマス以後に書かれたと考えられる「薙露行」「趣味の遺伝」には「戦後文界の趨勢」における相當に楽天的な展望とは異なる、死のイメージを中心とする「沈痛幽玄の趣」が強く存在しているのだが、この二作だけがそうだと言ひ切るつもりはない。こういう作品をうみ出す漱石の暗い内面が、戦中の「倫敦塔」「カールスル博物館」「幻影の盾」「琴のそら音」「一夜」にも潜在しているはずであり、やはり『濛虚集』全体を戦後文学として考える立場をとりたい。「早稲田文学」記者もそのように扱っているのだが、『猫』に見出せなかつたとする「沈痛幽玄の趣」に関し、記者は一方では宙外などを引きつつ「幽鬱なペーソスの趣き」云々とも述べていたことも見逃せない。

すなわち、さらに、文体について言及している点を見ると、『猫』と『濛虚集』を截然と区別する立場を記者はとっていないということがある。『猫』『趣味の遺伝』その他の分析的穿鑿的にして周密細緻の文体と「薙露行」「幻影の盾」もしくは「倫敦塔」の諸篇の省略的威圧的にして比較的緊張した雄到簡浄な文体との二種に記者は

分類してゐる。「琴のそら音」は前者にふくまれようし、「一夜」は後者に近い。ともあれ、今日のごとく『猫』と『濛虚集』を二つに区分して、その上で両者の関連を問おうとするのではなく、あわせ論じつつ、記者は漱石における二様の文体を問題にしているのである。一般の世評がこの種の新文体に対して推量の辞を惜しまなかつたとし、『猫』に代表される前者の文体は作者の写実脈を伝え、後者の文体はロマンティックな傾向、すなわち伝奇的傾向と重なりと記者は述べる。「この二面は、甚だしく矛盾し杆格せる反対の傾向の如くにして、而もこの作者に於いて不思議に結合せられてゐる。」と記者は統一的にとらえ、そうした事実の根底に横たわる事実を、「換言すればこの二傾向を容れて作者の一人格に統一せる所以のものは何であるか」と問うているが、ここにこそ日露戦後における作家漱石の全存在をとらえる正当な視角があると言えよう。⁽³⁾むろん、その実体はのちに「三四郎」や「それから」など戦後の作品に即して論及されねばならない。

また、『破戒』でも出されていた無恋愛小説ということに再度ふれて「最近わが小説壇に於ける新氣運の代表者に見らるゝ特徴の一つ」と述べているが、『濛虚集』に恋愛がかかわっていない。ないどころか「幻影の盾」「琴のそら音」「一夜」「薙露行」「趣味の遺伝」すべてこれ恋愛にかかわっているはずで、「幻影の盾」のキリアムとクララは地上でこそ結ばれないが、盾の世界の中では二人は永遠であり、「琴のそら音」の主人公は許婚者との愛は不吉なイメージを経つつも保たれている。「一夜」の二人の男と一人の女の間にも恋愛を想像させるものがあり、「薙露行」は騎士ランスロットをめぐる王妃ギニア・シャロットの女・エレインの死に向う悲恋の物語にほかならず、「趣味の遺伝」は本郷郵便局で二、三分会つただけで父祖以来の恋愛を自覚する神秘的な恋の物語である。にもかかわらず、あえて無恋愛小説と記者が呼ぶのは、そこに恋愛らしからぬ恋愛、すなわち、従来の恋愛小説の反措定としての恋愛を見うるからであろう。いずれふれたいが、漱石は「それから」でも従来の恋愛小説への反措定意識を明瞭に見せている。

そのことは、記者が漱石における二傾向の相抱合している事実の根底をたずねて理智の働きを見出し、さらにそこから懷疑的傾向、やがては「現実を去つて、縹緲として幽玄なる神秘の境に遊ばんとする傾向を生ずる」と

指摘していることも関連があるろう。漱石における二傾向の根底を現実離脱の方向でとらえる余裕派・低徊派の呼称もここから出てくる可能性があるのだが、「沈痛幽玄の趣」のなかに恋愛を見出そうとするのは、たんなる逃避ではなく、実はこういう地上的とは言えぬ恋愛への憧憬によつて、漱石は烈しい現実批判に向うという逆説もまた可能なのである。現実を去ると言つても、理知のはたらしきをそこに見る以上、記者は正確にも「一とたび現実を棄て了つて、而して、茲に新たな観照の態度を取つて再び現実に対する」と述べ、それ故に作者が作品の上に自己の人格をもつとも明らかにあらわしていると説いて次のように言っている。結びとみてもよい一節である。

……作風の根底が如上の事実基因する以上、作品と作者の個性との関係が、特にこの作者に於いて密接であることはいふまでもない。この点は単にこの作者のみならず、前段に於いて述べた『破戒』の作者に於いても、亦次ぎに述べんとする『運命』の作者に於いても、著しくかくの如き事実あるを認める。従つて全体に主観的であるといふこともいはれやうが、兎も角も在来の作品が、多くの作者の個性を發揮するほどに内部的生命の発動を見るに至らなかつたのに反し、最近の現象がこの点に於いても一種の新傾向を示してゐるのは、一の賀すべきことと言はねばならぬ。

記者は右の指摘を、漱石の「一体文学は進めば進むほどある意味に於いて個人的なるものであると思ひます。だから別段何々派だと標榜する必要もなからうと考へます。作其のものに直ちにその作者の人格、個人性が出て来る。」云々という談話（夏目漱石氏文学談「明39・8」）によつて裏づけているが、「何々派」という個別を越えた日露戦後文学の、内部的生命の発動たる作者の個性の發揮という「一種の新傾向」がここに明らかである。

また右の漱石の談話では、個性の發揮、個人の自由に言及しつつ、個人主義に対する「レゾリング、テンデンシー（平衡的傾向）」ということを述べており、さらにその三ヶ月後の談話でも「我国に大文学の出るのには次の時代である。即ち今の青年及び之から生れる人にと依つて作られるだらうと思ふ。今迄は古来の文学を復起し、そして西洋の文学を模倣するに止まつたので、真の日本文学の起るのは何うしてもこれから後がなければならぬ。」（「文学者たる可き青年」明39・11）として「戦後文学の趨勢」と同趣旨のことを述べ、「すべて文学は其国のナシヨ

ナリテーが現れるので、我国の文学にも亦それが現はれるであらう。」と漱石は語っていた。「精神といふのは自分ほこれだけの事が出来るといふ自覚自信の力である。この自覚自身の無い国民は国民として起つことは出来ぬ。」(戦後文学の趨勢)という、かつての発言においても、漱石は自覚自信ある個人と自覚自信ある国民とをきりはなして考えていたはずはなかった。その国のナシヨナリテーに根ざす「大文学」を今後の青年に期待する漱石と、『濠虚集』等に内部的生命の発動・個性の發揮を見てとる「早稲田文学」記者との間に矛盾はあるだろうか。ともあれ、のちの本論において「三四郎」「それから」を中心に、以上述べ来たった記者の見解をふまえつつ、考察して行く予定である。

さて、最後の『運命』(明39・3)は、『武蔵野』(明34・3)、『独歩集』(明38・7)につづく独歩の第三短篇である。『運命論者』(明36・3)、『巡查』(明35・2)、『酒中日記』(同・11)、『馬上の友』(明36・5)、『悪魔』(同・5)、『画の悲み』(明35・8)、『空知川の岸辺』(同・11・12)、『非凡なる凡人』(明36・3)、『日の出』(同・1)の九篇よりなるが(排列順)、いずれも日露戦後どころか、戦争開始以前に執筆・發表されたものばかりである。時期的には『独歩集』に近いが、それよりもむしろ以前の作品が多く、実質的な日露戦後文学としては、「号外」も収録されている第四短篇集『濤声』(明40・5)や第五短篇集『独歩集第二』(明41・7)をあげるべきかも知れない。

しかし、『早稲田文学』彙報欄記者は、独歩が前年の『独歩集』以来、にわかには認められるようになった点において、藤村・漱石と並べて最近小説壇の新傾向を代表するものとみなしている。『運命』のもっとも顕著な特質は「各篇の何れの作にも作者独得の意味、独得の趣致が遺憾なく現はれてゐることである」とし、ことごとく自叙体であること、自叙者すなわち作中の主人公の性格には一種共通の特質が認められると記者はまず指摘する。『文庫』の小島鳥水、『新声』の街頭の人、『太陽』の天溪らの批評を引きつつ、それらを「何れも其作中の人物が、神経質にして而かも社会の苦悶に敗れたる結果一種消極的の態度を取るに至つた、所謂、自棄的性格を以て一貫してゐる」と要約しているが、この指摘は日露戦後の秀作たる『窮死』(明40・6)、『独歩集第二』所収の主人公にも及ぶ独歩の短篇の特質をついていと言わなければならない。

「渠れが小説に頤はれたる人物の多くは、決して奮闘的人ならず、外に向つて社会と戦はんとする人ならずして、概ね社会の敗残者なり、敗残の極苦き涙を呑んで、其の煩悶の解決を内心に求めんとするものなり」(街頭の人)といった発言は、社会から疎外されて行く『破戒』の主人公への批評と重なるところがあり、『運命』の時代状況の先取ということがあるとしても、受けとめる側の戦後文学意識を読みとることもまたできるはずである。

要するにこの作に現はれた思想の特色は、一種の嚴酷シヤウコウの感、運命ウチメイの威圧力、若しくは吸収力、磁石のやうな牽き着ける力の存在するといふ感じと、それに牽き着けられ若しくは威圧せられてゐる人間の脆さ弱さの感じと、この両面が一つになつて、一種の頹廢的傾向を帯びた、萎靡沈滞の感、是れである。

記者が引く「東京日日新聞」の天弦生の批評だが、逃がれがたい酷薄な運命と孤立する人間の關係が指摘されている。「中央公論」の沼波瓊音がこの作者は宇宙の不可思議を知得している人であると言つたことも紹介されているが、これらは独歩文学の特徴をよくとらえているといふべく、日露戦争体験の上に立つた発言——「運命といふやうなものが不可抗の力を以て居ることや世界といふものは不思議な組織なものだと観ずること」と述べた角田浩々歌客の予測とそれは重なってくるのである。「運命論者」「酒中日記」「悪魔」などはそのまま日露戦後文学と言われるべき作品であるかもしれず、漱石の『濛濛集』の「沈痛幽玄の趣」とも通じあうものがある。とくに「酒中日記」は「日清戦争、連戦連勝、軍隊万歳、軍人でなければ夜も日も明けぬお目出度いこと」となつて、そして自分の母と妹とが墮落した。「云々とある痛烈な批判によつて日露戦後と二重うつしになつており、主人公大河今蔵の水死におわる悲惨さにおいても、たんに「頹廢的傾向」「萎靡沈滞の感」といつてすまされぬ社会批判の一面を所有している。したがつて、この点をしかと受けとめえない日露戦後の文学意識という問題もまた生じてくるのである。

さらに『運命』の結びの一篇「日の出」をとり出してみよう。「早稲田文学」記者はこの「日の出」に言及す

ることがないのだが、発表順から言えば『運命』所収九篇のうち、第五位にある「日の出」を結びに書いたのは、この短篇集の結びにふさわしい位置を作者が自覚していたからとも考えられる。また、記者が「日の出」に言及しなかったのは、やはりこれを評価しえない戦後文学意識が記者のみならず文壇一般にあったと考えることもじゅうぶん可能である。この短篇は雑誌「教育界」に発表されたものだが、青少年の教育にはその体験の上からも関心を抱いていた独歩が、自己の教育思想をこめて書いていると考えられる。

某法学士洋行の送別会席上、その出身学校を問われた新来の客が大島学校と答える。オックスフォードにもハーバードにも帝国大学にも早稲田にも三田にも高等商業学校にもいたことはなく、ただ故郷の大島学校を出たばかりであって、その出身をほこり、また心から感謝していると某新聞経済部主任記者児玉進五は語るのだが、みすばらしいこの小学校で、校長大島伸一、学校創立者池上権蔵にふれた学校生活の思い出がこの短篇の内容となっている。ある元旦の朝、青年池上権蔵は自殺しようとするところを老人大島仁蔵に助けられ、「朝日が波を躍出るやうな元気を人は何時も持つて居なければならぬ。／＼だから人は何時も暗い中から起て日の出を拝むやうに心掛けなければならぬ。／＼そして日の入まで、手あたり次第、何でも御座れ、其日に為るだけの事を一心不乱に為なければならぬ。」云々といった教訓を受ける。権蔵はこの日から生まれかわり、一心不乱に働いて五年目には祖先の田地もとり返し、村屈指の百姓となったが、大島老人のことは実践としてさらに五年間真黒に働いて小学校を創立、大島老人の一子伸一に献じ、大島校長は第二の権蔵となって「為す有る人となれ」「日の出を見る」等の訓言によって一心に児童を導いた――。冒頭の送別会あとの後日談もあるのだが、「日の出」に象徴される向目的な精神、希望・勤勉・力行・元氣・質素等の徳目は、まぎれもなくこの短篇の発表された日露戦争前夜の明治三十年代「国民的精神」のなかに独歩が見出そうとしたものである。すでに固定化しつつある学歴社会、利己的な物質主義が支配的になろうとしていた現実にあつて、独歩の思い描いた理想、青少年に対する教育思想がこの「日の出」にほかならないが、このことは日露戦後においてもますます意味を持つていくはずである。

敗残と孤独の心情、運命の不可抗力といった面に、「早稲田文学」記者をはじめとして戦後文壇の眼は向けら

れていたのだが、それはたしかに新しい側面であるにしても、半面、独歩は「日の出」における理想を戦後も保持しつづけたのであり、そのことは「当代青年は何故に精神的方面に於て繊細なる乎」(明39・21)の一文によつてしても明瞭である。当代の青年は体格ははるかに向上したが、それに反比例して懦弱優弱であり、多くは実業方面を目的として物質的、現在主義に陥っていると独歩は批判する。「諸君が無暗矢鱈に実業的、物質的の熱に罹るのは悪い。仮令豆を嚙つて古英雄を愧ばざる迄も、今少し精神的修養の方面に熱中して貰ひたい。それが国家の利益にもなり、当人の為にもならうと思ふ。」というのがこの文章の結論であるが、これはそのまま短篇「日の出」のモチーフと見ることができるのであり、さきに見た「号外」のモチーフともけつして無縁ではない。

独歩における右のような問題は、たんに独歩のみにとどまるものではなく、日露戦後の文学者に多かれ少かれ見られるところであるが、独歩に関してはさらにのちの「窮死」において本論で考えてみることにしたい。

(1) 三好行雄編『島崎藤村必携』昭42、学燈社、成瀬正勝・湯地孝・橋本芳一郎編著『国語国文学研究史大成14、鷗外漱石』昭40、三省堂、『国木田独歩全集第十卷』昭42、学習研究社。

(2) 拙稿『『破戒』私論』(『日本文学研究資料叢書島崎藤村』昭46、有精堂所収)参照。「序説」第二章の基礎稿となる予定である。

(3) 『濼虚集』については小文があり、この稿と若干重なるところがある(『漱石序説』昭51、瑞書房)。

(4) 福田清人『国木田独歩全集第三卷』解題(昭39、学習研究社)参照。

第五節 「日露戦争以後思想界の浮華動揺」

日露戦後の思想状況を歴史的にとらえ、自然主義をはじめ、戦後の文学への思想的位置づけを目ざしたもつともはやい試みのひとつとして、清原貞雄『明治時代思想史』(大10・10、大燈閣)をあげることができる。明治の記憶もまだ新しい大正十年という時期のものであるが、今日からすれば逆に斬新に思われるような叙述も見出され

る。明治初年から末年までを五期に区分し、第五期を日露戦争以後にあて、この期に十章を立てている。その第一章が「日露戦争以後思想界の浮華動搖」となっており、第二章が「自然主義」、第三章が「社会主義」であつて、「浮華動搖」と「自然主義」以下とは密接に関連するのである。清原貞雄は書き出している。

大なる戦争の後、特にそれが自国の勝利を以て局を結びたる場合に於ては、其財界の好況に伴ひ、其一部分に豪奢の風を生じ惹て一般的浮華の思想を誘置する事は古今東西常に其軌を一にす。

日露戦後早々、国民の自信・自立への期待を漱石をはじめ多くの文人は語っていたのだが、後掲の戊申詔書にも明らかのように「荒怠相誠メ」ねばならぬ状況が一、二年を経ずして生まれていた。大正期のこの思想史家の眼もそこに向けられる。

文部大臣は特に一般思想の浮薄を戒むるの訓示を發し、次で四十一年には所謂戊申の詔勅煥發せられて時弊を戒め給ふあり、識者は恐懼措く所を知らざりしと雖も不健全なる思想界は之を以て猶根本的に救はるゝ事能はざりき。

斯の如き際に当りては青年子弟は其帰嚮する所を失ひ、浮薄なるものは当時の所謂成功を追はんとし、然らざるものは懷疑に陥り、煩悶に沈み、或は自己本位主義に抛らんとし、紛々擾々として安住するところを知らず、後章述ぶるところの自然主義思想も、一部の矯激なる無政府主義思想も、又之が救済の爲めに鼓吹せられたる旧道德も悉く此不健全なる思想の反映にあらざるなし、

右の文部大臣云々は、文相牧野信頭が明治三十九年六月九日、学生風紀に関する訓令を發したことをさすとみられるが、「東京日日新聞」(明39・7・21)には「文部省戒飭令の主旨に従ひ、警視庁にては一般学生が思想の變調に趨むくを防がんが爲め、彼等の思想を乱して不健全ならしむる種類の集會に対しては、其社会主義たると、文学、美術的たるとを問はず、一切学生の入場を禁ずる由にて、現に之を勵行しつゝある由なるが」云々とあり、警察権の濫用を学校側では警戒している旨の報道がある。為政者にとつては、つねに「青年子弟」の動向が重要な問題であつたわけだが、「文相訓令ノ音ノミ大ニシテ実果更ニ上ラズ」(明39・7・2「やまと新聞」として

女連れの学生に鈴を鳴らす文相の漫画が出たりする状況にあって、ついに天皇の名による詔勅を出さねばならなかった。

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ愛ニ益々国交ヲ修メ友誼ヲ惇シ列國ト与ニ永ク其ノ慶ニ頼ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠沢ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戦後日尚淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠実業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ夷ニ就キ荒怠相賊メ自彊息マサルヘシ

抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬励ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ処シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ体セヨ

明治四十一年十月十三日に出された戊申詔書の全文である。日露戦後間もない状況にあって、すべての政策はますます拡張を必要とするとして「上下心ヲ一ニシ」をまず打ち出しているが、これはむしろ国家と国民の一体感を失った状況を逆に裏書きするものである。また、「忠実業ニ服シ勤儉産ヲ治メ」とあるのは、怠惰、浮薄の傾向が強まっていることを示す。以下、信義を訴え、浮華をしりぞけ、実を尊び、荒怠を戒めて、みずから勉励することが求められている。こういう詔勅をあえて出さねばならぬ状況がすなわち、清原貞雄の言う「日露戦争以後思想界の浮華動揺」なのである。

さきに引いた独歩の「当代の青年は何故に精神的方面に於て繊弱なる乎」にも、青年の浮薄と墮落への言及があったが、青年のみに原因があるのではなく、「当今の雑誌社会に於ける風潮が余程物質的思想を鼓吹するやうになつて、如何にも浅薄な成功主義をば如何にも真理の如く書き立てるものが多いからである。」と独歩は言う。漱石の「門」(明43・316)にも主人公の宗助が齒医者 の 応 接 間 (待 合 室) に 置 かれた「成効」という雑誌をとりあげる場面があり、「成効の秘訣といふ様なものが箇条書にしてあつたうちに、何んでも猛進しなくつては不可ないと云ふ一ヶ条と、たゞ猛進しても不可ない、立派な根底の上に立つて、猛進しなくつてはならないと云ふ

一ヶ条を読んで、それなり雑誌を伏せた。「成効」と宗助は非常に縁の遠いものであつた。(五)と描かれている。「浮薄なるものは当時の所謂成功を追はんとし」と清原貞雄は言っているが、事実「成功」という雑誌がひろく読まれていた。成功雑誌社から明治四十三年六月に刊行された『新論語』なる書物には「此書必ず、今日の世道人心を裨益せん」と言う大隈重信の序がある。清原貞雄が「浅薄な成功主義」だけでなく、自然主義・無政府主義をふくめつつ、儒教などの旧道徳をも「悉く此不健全なる思想の反映」とみなしている点に注意したい。新思想に対して、武士道の鼓吹というかたちでの旧道徳の復活をはかる「識者」も多かつたのである。「青年子弟は其掃蕩する所を失ひ」ともあつたが、そのまま正宗白鳥はその小説に「何処へ」と題しており、この作品に武士道の衰微を歎く父親や大学教授が描き出されている。また、高山樗牛などの本能生活主義(美的生活論)が日露戦後、文芸上の思潮として現われたのが自然主義とされ、自然主義はまさに「不健全なる思想」の代表的文芸思潮として一般にも目されていたのである。

……其主張に云ふ、人生の意義はすべての虚偽裝飾を除きたる自然の姿に於て始めて明らかなるものなり、道徳と云ひ、宗教といふも悉く之れ真を蔽ふの粉装に過ぎず、最もよく人生の意義を表示するものは赤裸々なる現実のみ、自然主義は此人生の真を描くを目的とし、之を蔽ふ所の一切の理想を排斥す、現実の事象中には善美なるものと醜悪なるものと共に存在す、苟も芸術家にして其一面のみを写して他の側を閑却すとせば、そは真の芸術といふ能はず、一切の粉飾を去り、一切の皮相を棄て、其現実の奥底を有りのまゝに描写して始めて真の文芸の目的を達するものなりと。

右の一節を見ても、清原貞雄の自然主義理解が恣意的なものとは考えられないが、「自然主義者より見るときは、人間は決して靈肉のものにあらず、只自然の一部として唯一個の肉塊のみ、其本性を露呈せば寧ろ醜穢なる方面に充滿するものと見る」と自然主義の特質を受けとめるとき、個々の自然主義作品の有しているところの、たとえ、人間を肉塊と呼ぼうとも、かならずしもたんなる肉塊としてはとらえていない、新しい人間像の問題がうちすてられてしまう危険が生じてこよう。思想史と文学史の問題がここにもひそんでいるのだが、自然主義に對する、いわゆる反自然主義としての文学者たちの存在を想起するとき、「不健全なる思想の反映」とされる自

然主義への全的肯定もまた困難であることがわかってくる。とくに、漱石・鷗外らの文学は自然主義でも無政府主義でも旧道徳でもない地点から、「日露戦争以後の浮華動搖」に對しようとしたと考えられるし、両者にかぎらず、自然主義作家をふくめて戦後の文学者の態度・志向に、状況とのぬきさしならぬかわりが見られるはずであるが、それらはむしろ具体的な作品論のなかであらためて検証されねばならない。

独歩や清原貞雄の文章にもあったごとく、当代の青年の現状とその方向が文学者をふくめて「識者」、あるいは為政者の切実な関心事であったが、さらに任意の一例をつけ加えておこう。村上專一『通俗修養論』（明44、4、丙午出版社）なる一冊がある。その自序にもあるごとく、「文壇上にあれ、また演壇上にあれ、近頃盛んに流行しつつあるものは修養論」であつて、同じ出版社からも『修養史譚』『人物の修養』『修養の模範』などが前文部大臣・外務大臣などの序をつけて刊行されているのだが、「物質的文明の發展に連れて起る所の金錢万能主義は、益々その熱度を高めんとするものありと雖も、亦たその反對に精神上種々の疑問を若起し來つて、之が解決を求めんとするの傾向なきにあらず。」（自序）とあるように、『通俗修養論』は他の修養論と同じく、物質主義に對する精神の問題を個人の修養という次元で受けとめようとしている。もつとも、修養論のなかには、成功主義のための修養を説くごとき実利的な性格のものもあつた（加藤咄堂『修養論』明42・4、東亞堂書房）。

さて、この仏教学者・文部村上專一の修養論はその凡例に、「本書既に題して通俗といふ。意は後進の青年諸君を誘導して修養の途に就かしめんとするにあり。」「本書は青年諸君に對し成るべく健全なる人格を養成せしめんとす。」云々とあり、『自信録』『女性訓』『誠のしるべ』など啓蒙的人生論の著者村上專一にあつても、むしろ青年が問題であつたことを示している。彼は、西洋の哲学及び科学の研究主義に對して、東洋の仏教及び儒教の実践主義・修養主義を強調し、国民道徳の標準として教育勅語の一節「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ共謙己ヲ持シ博愛衆ニ及ホシ」を引いて「実に吾人が須臾も相離るゝことを得ざる所のものにして、早れが即ち道といふものである。」（第七章 道徳と修養との關係）と説いている。むしろ戊申詔書と呼応する教育勅語の再確認である。全十章のうち、第十章「修養の方法」が全巻の半ば以上を占め、具体的な方法が列挙され、詳

論されている。

唐木順三氏は明治の儒教的な「修養」に対し、大正・昭和の「教養」をとりあげ、前者における型・形式をしりぞけたところに「教養」を見ている。福沢・逍遙・透谷・樽牛を経て「やがて無理想を看板とする自然主義にいたつて最高潮に達した書生の、ハイカラにいへば知識階級の自己表現は、外面的な型、規範、慣習に対する反撥であつた」とし、一般社会がこの傾向に怖れと敵意をもつに至つたのは大逆事件が契機であつて、型への個性な反撥が批判となり、批判者が自らの型を持つとして新旧対立、ひいては弾圧となつたと説く。「修養」と「教養」の対立であるが、大逆事件の記憶のまだ新しい明治四十四年四月に刊行された『通俗修養論』の位置はこれによつても明白である。

だが、唐木氏も述べているように、鷗外や漱石は、大正の「教養」派より一世代上にあり、しかも旧来の「修養」派とも異なる位置を自覚しえていた人間であつた。とくに鷗外は「新なる形式」の探究を言いつつも、生涯自己自身の型を保持した人間であり、明治の終焉にあつて草した「興津弥五衛門の遺書」にもそれは明瞭である。また、漱石にしても明治天皇の崩御に際して明治の世代と次の世代とのかかわりのなかで、「明治の精神」の栄光と悲惨を『こゝろ』で描かざるをえなかつた。「教養派の発生基盤はかくして、社会的地盤をもたない小市民の自己優越と自己逃避のうちにある」(唐木)とすれば、また、さらに芥川龍之介の自死は大正期以来の「教養」の無力を事実において示したものとすれば、「教養」がしりぞけた型・形式の問題を全否定し去ることもむろん許されないはずである。鷗外・漱石らをふくめて日露戦後の文学者たちの苦悩もここにあらうが、村上專一の修養論に示されるような教育勅語——戊申詔書を基盤とする青少年への説教ではない地点で、彼らは「日露戦争以後の思想界の浮華動搖」の状況に対決し、日露戦後文学を創り出してゆくのであり、そのいくつかの例をとりあげ、それら作品群に新たな検討を加えることが、本論以下の課題である。

(1) 白鳥「何処へ」は本論第二部に一章が設けられる予定である。

(2) 『現代史への試み』(昭24、『唐木順三全集第三巻』昭42、筑摩書房)参照。

(3) 拙稿「鷗外と明治の終焉」(昭48・8「国文学」)参照。本論の基礎稿の一となる予定。
 (4) 拙稿『「ころろ」の漱石』(『漱石序説』所収)参照。本論では、あらたに再論を考えている。

(付記) 本稿は目下進行中の「日露戦後文学の研究」の「序説」第一章の基礎稿であり、注記でしばしばことわったこととく、具体的な作品論は本論で用意したい。なお、越智治雄・三好行雄・紅野敏郎氏との共著『日本の近代文学』(昭51、日本放送出版協会)所収「日露戦後の文学」は本研究の輪廓ないしダイジェスト的性格のもので、若干の重複はあるものの、別稿であることを付記する。

—昭51・10・1—